

岡田新吾さん・星野雨さん

2018年にクッピーラムネの絵本を発表した
児童文学作家・絵本作家の岡田新吾さんと、
イラストレーター・絵本作家の星野雨さん。

2人はどちらも各務原市の出身です。
それぞれの歩みや共作の経緯などを合わせ、
地元に対する思いや今後の目標などを聞きました。

子ども向け出版物の制作を経て
多数の児童小説や絵本を発表

1963年の発売開始以来、たぐ
さんの人たちに愛され続けているラ
ムネ菓子「クッピーラムネ」。ウサ
ギのクッピーちゃんとリスのラムち
ゃんが丸太に座ってラムネを食べて
いるパッケージデザイナーは、誰もが
一度は目にしたでしょう。2018
年、そんなキャラクターたちが主人
公になった絵本「クッピーとラムの
たのしい森のピクニック」が発売さ
れ、大きな話題を呼びました。

主人たちが得意なことを生かし
て助け合うストーリーを書いたのは、
各務原市出身の児童文学作家・絵本
作家である岡田新吾さんです。各務
原市で生まれ育った岡田さんは、大



ともに各務原市出身の2人。「絵本をつくるときも、お互いに思い描く風景が似ているのかもしれない」と話してくれました

児童文学作家・
絵本作家
岡田新吾さん
Osamu Shingo
名古屋の広告デザイン会社、
有限会社エピソードの代表取締役でもあり、
中日新聞が発行する小学生
校読書年向けの週刊新聞
「中日こどもウイークリ
ー」の制作なども行っ
ています

各務原の
豊かな自然が
大好きです



イラストレーター・
絵本作家
星野雨さん
Hoshino Ame
デジタルと水彩画
を融合させた、独
特であたたかみのある表現を得意として
います

小学生向け学習雑誌「4年の科学」
の巻頭特集ページを中心とする編集
を7年間にわたって担当するなど、
子どもを対象にした出版物の分野で
も活躍。2009年に児童小説約
束の「つばさ」を発表し、作家デビュ
ーを飾りました。

これまでに多数の著書を出版してい
ます。
2人が共作にいたった経緯と
作品づくりでこだわったこと

中学と高校を経て、名古屋市内のデ
ザイン専門学校を卒業。現在は企業
SNS広報やイラストディレクター、
原宿ファッションのイラストなどを
手がけています。
2人の出会いは今から6年ほど前。
星野さんが、岡田さんの会社でイン
ターンシップを経験したのがきっかけ
でした。



2019年11月にイベント「マーケット日和」の一環として開催された「絵本クリエーター展 各務原2019」。各務原市中央図書館と学びの森にあるカフェ「KAKAMIGAHARA STAND」の2箇所で行われ、たくさんの子供や保護者で賑わいました。今年1月から2月にかけての1ヶ月間、草書BOOKSの各務原店で行われた「絵本クリエーター展 in 草書BOOKS」



これまでに岡田さんが手がけた児童小説や絵本の数々。クッピーラムネの絵本「クッピーとラムのたのしい森のピクニック」(三恵社)をはじめ、2009年に発表した児童小説の処女作「前束のつばさ」(ゆいぽおと)、東山動物園監修の「シャバーニ だいすき」(三恵社)、2019年に発売されたもっとも新しい絵本「あちちあちち」(三恵社)など、多彩な作品を発表しています

「クッピーとラムのたのしい森の
ピクニック」は、かわいらしく現代
風にアップデートされたクッピーち
ゃんとラムちゃんも大きな魅力。イ
ラストを担当したのは、同じく各務
原市の出身で、イラストレーターや
絵本作家として活躍している星野雨
さんです。星野さんは各務原市内の

2019年7月には、名古屋の栄地
下街で開催された「絵本クリエータ
ー展2019」に出展。その後も、
同年11月に各務原市の「学びの森」
一帯で「マーケット日和」にあわせ
て開催された巡回展でも紹介されま
した。さらに、今年に入ってから
「絵本クリエーター展」の巡回は続
き、草書BOOKSの各務原店でも
イベントが行われました。

記憶に残るような表現を目指してい
きたいです」と話しました。
さらに2人は「各務原市の魅力や
作品に取り入れていきたい」という
思いも共有しています。「児童小説
を書くときも、幼い頃に見た風景や
思い出をイメージすることが多いん
です。各務原は、きれいな木曾川が
流れていたたり、にんじん畑の景色
が広がっていたり、とても自然に恵ま
れた場所。今回の絵本でも、星野さ
んと2人で地元をロケハンしたんで
す」と岡田さん。星野さんも「毎秋、
各務原がせ町の村国神社で行われ
ている子ども歌舞伎や、名産品である
各務原にんじんや鮎料理など、地元
の郷土芸能や文化なども積極的に発
信していきたい」と声をそろえます。
ともに各務原市出身のクリエータ
ーである岡田さんと星野さん。2人
による絵本の共作は、まだまだ始ま
ったばかりです。これから同じ地
元であることの利点を生かしなが
ら、たくさんの方の羨望を醸成する
べく、つづけていくことに決まっています。